フルネルソン

永倉万治

ネルソン

永倉万治

工业学院图书馆
藏书章

講談社

永倉万治（ながくら・まんじ）

昭和23年、埼玉県生まれ。立教大学中退。〝東京キッドブラザース〟に在籍後、放送作家、広告プランナーなどを経て作家に。著書に「みんなアフリカ」「陽差しの関係」「黄金バット」ほか多数。「アニバーサリー・ソング」で講談社エッセイ賞受賞。

N.D.C.913 276P 20cm

フルネルソン

一九九七年七月二五日　第一刷発行

著　者　永倉万治（ながくら・まんじ）
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　〒一一二―〇一
編集部　〇三―五三九五―三五〇五
電話　販売部　〇三―五三九五―三六一二
製作部　〇三―五三九五―三六一五

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　和田製本工業株式会社

定価はカバーに表示してあります。

©永倉万治　一九九七年　Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-208758-8　（文2）

1600円

フルネルソン

装幀　真鍋太郎

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

1

放課後のけだるい午後三時、少年は白い丸首シャツに黒い海パン、それに真新しいレスリングシューズを履いて、のそのそと体育館に入っていった。いつもこの時間になると、ぼーっとして体が重かった。草の匂いと午後三時過ぎのやる気のなさが、さっきから少年の体にまとわりついている。アブが少年の顔の周りを飛んでいる。しつこいアブだった。彼は「うるせいな」といいながら、アブを相手にボクシングのウィービングをしながら手で追い払った。

体育館を入るとすぐ横に体操の平行棒やマットが置かれた小部屋がある。彼は戸口に屈み込み、シューズの紐を締め直した。マットのビニールの匂いにすえた汗の匂いが混じりあって、発酵したような臭気が鼻をつく。

「ああ、やるか」と少年は呟きながら、大きなレスリング用のマットを運び出し始めた。少し遅

れて他の部員もやって来て、全員で体育館の床半分にマットを敷き詰めた。この仕事が結構大変なのだ。すでに少年の体からは、うっすらと汗が滲み出している。

少年は、だらけた気分のまま立ち上がり、体育館の外をぼんやりと見た。そこからはラグビー場のポールが見えるだけで、他には何も見えなかった。体育館のすぐ近くには背丈が一メートルもある草の密集した大きな原っぱが広がり、遠くに欅の林が続いている。

やがて、キャプテンの号令が飛んで、少年たちはマットの周りを走り出した。ファイト！　ファイト！　レスリングシューズが体育館の床に擦れ、規則正しい音を刻む。

ランニングが終わると柔軟体操に変わり、腕立て伏せ、腹筋運動、マットに頭をついてブリッジ運動とリズミカルに進んでいく。それがすむ頃には、少年たちの顔は紅潮し始め、どんよりとした曇りが取れて、初めて凜々しい顔が出現するのだ。

タックル練習が始まった。少年たちの鍛え抜かれた体から、汗がしたたり落ちる。三年の大柄な高校生のワキガの匂いがツンとし始めた時、マットの上に「スパーリング、始め！」とくぐもった声が響いた。

部員たちは汗でへばりつくシャツを脱ぎ捨て、二人ずつ組になってスパーリングを始めた。両足タックル、片足タックル、フルネルソンにハーフネルソン、股裂きにトルコ刈り……。

少年の相手は三年のワキガ野郎だ。二人はさっきから頭をぶつけ合い、腕を取ろうと鋭い動きを繰り返している。汗で濡れたマットの上を移動するたびにレスリングシューズがきゅっきゅっという音をたてる。ワキガ野郎の三年は、腹筋が三段に分かれ、日頃の練習の成果が明らかだ。少年の方も肩の上の筋肉が盛り上がり、細身ながらもレスラーらしい体をしていた。ワキガ野郎

は青い海パン。少年は黒い海パンを穿いている。レスリングパンツ（通称レスパン）は、試合の時に着用するだけで、いつもは水泳用のパンツ（通称海パン）を穿いているのだ。

二人とも息があがってハアハアいっている。やがてワキガ野郎の三年が少年のバックを素早く取り、マットに組み敷いた。二人の息はさらにハッハッと大きくなり、マットにへばりついた少年は顔を歪めて裏返されるのを必死に耐えている。ワキガ野郎は妙に肌が白く、上気したピンク色の餅肌が汗でぬるぬると光っている。ワキガ野郎は、さらに両腕を少年の腋からこじ入れて、フルネルソンにきめようとするが、少年はそうはさせまいと必死に首をもたげて堪えている。その時だ。バックを取られていた少年が、一瞬の隙をついてワキガ野郎の腕をつかみ、巻技に投げた。ワキガ野郎が小さな呻き声をあげてマットに転がった。少年は素早く上になり、フォールの体勢になる。マットをとんとんと叩く音がした。フォールがきまったのだ。

クソ！　ワキガ野郎が顔を歪めて呻いた。

黒パンツの少年は、レスリング部に入部したての頃、三年生の体の大きな髭づら部員のスパーリングの相手をさせられた。

あっという間だった。マットの上に倒されて、どうなっているのかもわからないままフォールをきめられた。悔しかった。髭づらの三年は「これな、フルネルソンっていうんだ。お前のような初心者しか、この技はかからねえよ。へへ」と鼻で笑った。

少年が、最初に覚えた技であった。

フォールされたワキガ野郎の三年は、息をハアハアさせ、無念の表情でマットから体のバネをつかって思いきり立ち上がった。

相手が替わり、スパーリングが続いた。
やがて体育館に明かりが灯る頃になって、練習は終わった。
「はい、やめ！」とキャプテンの大声が体育館に響きわたる。
少年は体育館を出て、近くの水飲み場に走った。思い切り水を出し、蛇口に口をつけた。水が勢いよく口の中に流れこむ。この快感。喉から胃まで冷たい水が移動していくのがわかる。水分が体中に染みていくようだ。水を飲みながら、少年はふと顔を上に向けた。そこには暮れなずむ四月の空が横たわっていた。少年は汗と水道の水とでびしょ濡れになった顔を上げ、その場に立ち尽くした。
空は、一瞬茜色に輝き、やがて暮れていった。

昭和三十九年の春、清島浩二はR高校の二年生になっていた。R大の付属高校で、浩二はそこの中学から上に上がってきた。
当時のR高校は、のんびりしてエリート校でも進学校でもぜんぜんなく、将来官僚になることも絶対になく、良くて芸能人で有名になれるかどうかというのが相場だった。そのかわり裕福な家のガキが多く、周りからは、おぼっちゃん学校と呼ばれていた。四年前にR高校は池袋から埼玉のS町にある広大な土地に引っ越してきたのだ。都内から通う生徒がほとんどで、朝鮮特需で基盤を造り、高度成長の景気に乗った下町の鉄工所やメッキ工場、鋳物屋、それに銀座あたりの小金持ちの商店主の子が多かった。要するに戦争からやっと立ち直った頃だったから、親たちは、せめて子供には自由な明るい学校に通わせたいとそう思ったのだろう。キリスト教のハイカ

ラなイメージと、大学までエスカレーターというところも大いに魅力だった。だから、小金持ちの裕福なことをいいことに、オシャレとナンパにうつつを抜かす生徒が非常に多かった。

清島浩二の家は、高校のあるS町で洋品店をやっている。軍人だった父親が戦後、細々と始めた店だったが、昭和二十年代は下着でも何でも店に置いておけば売れる時代で、面白いように儲かったという。朝鮮動乱はあまり関係がなかったそうだが、物不足の時代に清島家はせっせと小金を貯めた。

浩二の両親が必死に働いて生活にゆとりができた時、せめて子供たちにはいい教育をうけさせようと思ったのも当然だろう。東京でもまだ中学受験をする子供は珍しかった頃に、浩二はわけもわからぬまま都内の進学塾へ通い、R大の付属中学に合格したのである。

当時は〝自由〟という語感が非常に良かった。だからことさら〝自由の学府〟のイメージがあったR大学にエスカレーター式に上がれるのが何よりも魅力だったと浩二は、母親から聞いたことがある。

浩二がR高校に通っている間は、一応、清島家の商売も順調に伸びていった。使用人も何人かおき、結構儲かっていたのだ。それも浩二が大学に進む頃までで、大手のスーパーマーケットがS町にも進出し始めると、あっという間に没落していったけれど。

昭和三十九年は辛うじて、清島洋品店が儲かっていた最後の年だったといえる。

浩二は、〝自由の学府〟の中で、のんびりと何も考えずにレスリングと、時には当時流行りだしたアイビーファッションにかぶれることと、それに少々のナンパに走ることに没頭していさえすればそれで良かったのだ。

校長が演壇に上がってこう宣言している。

「諸君、今日から本校は男女共学になりました。男子だけの伝統を築いてきたR高校の長い歴史が今日変わるのです。それでは、女子が入場します。拍手で迎えましょう」

男子生徒は口をポカンとあけたまま、信じられないという顔をして左右を見渡し、それから脱兎のごとく体育館の入り口に殺到した。

列の後ろの方では、「見えねーぞ」という声が飛び交い、物は投げるわ、やたらジャンプする生徒はいるわの大混乱になった。

清島浩二は列の真ん中にいて先頭の女の子が出てくるのをいまか、いまかと待っている。興奮で胸がはちきれそうだった。見えてきた。女の子が群れをなしてこっちへくる。甘くせつない気分に体中が震えて、思わず「うわっ、すごい！　いいと思うよ」と叫び声をあげた。

その声で浩二は目が覚めた。

「チエッ、なんだ夢か」

朝の光が窓から差し込んで、目覚まし時計のどこか間のぬけた〝白鳥の湖〟のメロディが流れていた。このメロディを延々と聞かされると、いつも時計を叩き壊してやりたくなる。「クソッ」と放り投げて、〝白鳥の湖〟が止まった。浩二は、どこか物悲しい気分のまま起き上がり、床に足を降ろした。一年前に新築して木の匂いも新しい六畳の洋室は、いつも雑然としたままだ。むさくるしい男の部屋には不似合いな聖母マリアのポストカードがベッドサイドの壁にピンで止めてある。信仰とは無関係な単なる思いつきだった。窓の上の壁には、衝動的にマジックで

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

杜甫の漢詩を書きなぐったあとがある。あとは志賀高原のペナントが飾ってあるぐらいで、計画性とか用意周到とは無縁の性格であることが一目瞭然の部屋である。

浩二は半分寝ぼけたまま、窓の外を見ていた。学校に女の子がくる夢は、これで二度目だ。なんだか情けない夢だな。誰にもいったことはないが、浩二は男女共学に憧れている。浩二の行っているR高校は男子校だ。それに付属の中学も同じく男子校だった。思春期にずっと男ばかりで過ごすのか。それも気楽でいいとは思うが、たまには女の子と一緒に学校に行きたい。

ずっと前の日曜日に、井の頭公園まで行ったことがある。その時、浩二と同じ年頃の可愛い女の子が池をバックにして写真を撮っていた。可愛い女の子は突然、フレアースカートをひるがえしてくるくる回って見せた。浩二は、思わず、うっとりとなって目が離せなくなった。それ以来、布団に入って明かりを消すと、頭の中にフレアースカートがくるくる回るシーンばかり何度も浮かんでくるのだ。フレアースカートの回転を見つめるうち、いつしか体は火照りだし、純粋な気持ちはコロッと消え去って、清楚な少女の顔が、急に肉体派女優の三原葉子に変わる。その途端、我慢しきれず、つい、股間に手が伸びて、オナニーをするのである。

またやってしまった。後悔が部屋中を包みこむ。そんな時は壁に張った聖母マリアのポストカードにお祈りをする。いつもこれの繰り返しだ。虚しかった。そういえば、中学三年の修学旅行の記念写真を思い出す。写真を見ると、クラスメイトのガキどもは全員けだるい顔をしているのだ。少なくとも、浩二と同じ部屋に泊まった八人の生徒は、皆確実にけだるい顔をして写真におさまっていた。浩二はそれを見るたびに笑いが止まらなくなったものだ。同じ部屋に泊まった生徒は、夜更けて枕投げに狂いだし、全員、声は裏返るし、布団はぐちゃぐちゃになるしで、もう

何がなんだかわからなくなった。枕投げにも飽きたが、消灯の時間はとっくに過ぎていたから、どこにも行けない。疲労と興奮で身の置き所がなく、誰もが寝返りを繰り返していた。すると誰かが、よせばいいのに告白しだした。クスクス笑い声が聞こえて、告白合戦が始まった。喉は嗄れるし、もう寝るしかないなと思った瞬間、誰かが、いきなりオナニーをしだした。再び勢いがついて、全員、目をらんらんと光らせ、ついに、どっちが早く飛ばすかで賭けが始まった。八人が仲良くオナニーの競争をしたのだ。その余韻が翌日の写真にそのまま写っているというわけだ。けだるい顔をした愚劣な野郎ども。思い出すたび、笑ってしまう。

いつだったか、保健の伊藤教諭が、家での生活をきちんとしなければならないと変な前置きをしてから、オナニーについて、やたら大きな声で授業をしたことがあった。

思えば、時代は昭和三十九年であるから、いまと違って素朴な間違いも多かったに違いない。「夜、ひとりになる時がいちばん危ない。精神が強ければいいが、残念ながら諸君はあまり強い精神の持ち主とはいえない。そういう時はどうするか？　いちばん良い方法を教えよう。それはですね。布団の外に両手を出して寝ること。いいかね」

浩二は、そこまで思い出すと「そんな簡単にいくわけないよ」と床に落ちていたチリ紙を丸めたのを拾った。昨夜の残骸だ。そして母親に見つからないようにゴミ箱の下の方に突っ込んだ。

その時、階下から「浩二、早く食べないと遅れるよ」と母親の声がした。

「わかってるよ。うるせいな」

去年、清島家では店と住まいを新築した。一階が洋品店で二階に清島一家が住んでいる。店番しながら飯の支度ができるようにと、台所だけが一階にある、おかしなつくりの家である。

浩二の家はS駅の北口を出て徒歩三分ほどの旧道沿いにある。かたやR高校は駅の南側、約二キロの場所に位置している。S駅は、駅舎といっても木造の粗末な建物が建っているだけだった。南口に降りるとそこには広場があると書けばいいイメージだが、まだ舗装もされず、単なる田舎の駅前だった。雨になればいたる所に水たまりができて、運の悪い生徒は、泥水にはまって「あああ、靴が……こんなになっちゃったよ」と嘆くのであった。

浩二は、一年の最初だけスクールバスを利用したが、レスリングを始めてから、両手を同じように使えるようにと左手で食事をしたり、トイレに入った時も左手で尻を拭いたりしていた。スクールバスもその時から乗らないと決めた。速足で家から学校までの約十八分の距離だ。そこを毎日歩いた。家から旧道と呼ばれている道を一直線に川越街道に向かって行けばいいのだ。その間には建物といっても民家がちらほらあるだけで、あとは畑が広がり、道路の左右、所々に欅の大木が枝葉を広げて聳えていた。かつて野火止用水が流れていたその道を歩いて行くのだ。

やがて右手に酒屋がポツンと見えてくると、あともう少しだ。R高校の生徒がこの酒屋をちょくちょく利用しているうちに、おばさんがひとりでのんびりと店番していることに目をつけた目端の利く悪ガキがいて、魚肉ソーセージだとかコカコーラを集団万引きして、問題になったことがある。

やがて学校が見えてきた。

広大な敷地である。通用門をくぐって行くと左手にモダンなデザインのチャペル、反対側に校舎が見えてくる。その校舎の向こう側には陸上競技場、野球のグラウンド、体育館、プールなどがある。その他に寮もあり、外国人教師の家やチャプレンの家などがのどかな風景の中に点在し

ている。
設備は整っているのだ。しかし、設備は整っていても、必ずしも良い成績にはつながらない。体育会系各部の成績で、誇りを持って人にいえるようなものは何もなかった。
浩二は横目でチャペルをチラッと見ながら、歩いていく。野火止の何もなかった野っ原に突如チャペルが出現した時、周りの農家のじいさま連は大きな十字架を見上げ、「えれえもんができたんべ。おったまげた。へえ、豪儀なもんだな」といい合ったという。
それほど、このチャペルは前衛的というかモダンというのか、ともかく形が珍しかった。
浩二は、砂山のようなこのチャペルの形が好きだ。だからといってチャペルの中に入るわけではない。形が好きなだけだ。それだけだ。
浩二は校舎に向かって速足で歩いた。
うしろから「おはよう」と声がした。
振り返ると同じクラスの阿蘇(あそ)だった。
「おお、お前、バスじゃないのか？」
「ああ、今日は歩いてきた。金、ないんだ」
「そうか。阿蘇とはまた同じクラスだな」
「ああ、よろしくおねがいします」と阿蘇は時々間の抜けたような丁寧(ていねい)な言葉を使うことがある。
「こちらこそ。へへ。美術部だろう」浩二はつられてニヤッとした。
「ああ、そうだ。この間、ギター買ったんだ。今度遊びにこいよ」

「へえ、ギター弾くのか？」
「コードを少しね」
「ふーん。いいな。絶対、行くよ」
阿蘇とは中学から同じクラスになることが多かった。三河島でメッキ工場をやっている家には中学の頃からよく遊びに行っていた。
「なあ清島、作曲したことある？」
「ないよ」
「そうか。僕ね。いっちゃおうかな」
「なんだよ？」
「いま女の子のことをさ。えっと、曲、作ったんだ。今度聞かせるよ」
「ああ、いいね」
阿蘇は、なんというか、変に純粋なところがあって、夢見心地のまま数日を過ごすようなロマンチック少年である。それでいて、時折何か呟くようにぽそっという言葉は、妙に重みがあるから不思議だ。
「ねえ。ピーター・ポール&マリーのコンサート、行かない？」
「〝パフ〟だっけ。フォークソングだよな」
「ああ」
「流行ってるの〝パフ〟一曲だけだろう？」
「うん。でも、この間、レコード、買ったんだ。いい歌ばっかりだよ。ブラザース・フォアより

絶対、この方が、いいと思うな」
「ふーん」
「すごくいいんだから。新宿の厚生年金会館でやるんだよ」
「うん。わかった。行くよ。阿蘇、切符、買っておいてよ」
「ああ、いいよ」
「あっ、いけねえ。おい走ろう」と浩二はいった。
午前八時五十八分になっていた。
二人は、あわてて正面の校舎に走り込んだ。

2

二年九組。浩二のクラスだった。
クラス替えも済んで、新しい学期が始まって一週間が過ぎたが、思春期の生徒は、気心が知れていると思っていても、突然ぐれだしたり性格が凶暴になったりで、油断はできなかった。
中学では、いるのかいないのか影が薄かった生徒が突然学校の人気者になる場合もあったり、そうかと思えば、高校に入ってから、積極的にならなければいけないと深夜決心したのか、教室で何でも真っ先に手をあげて大声でわめく奴もいたし、中学の時は天体研究部に所属していたお

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.